

Economic Monitor

輸出の減速が鮮明に（6月貿易統計）

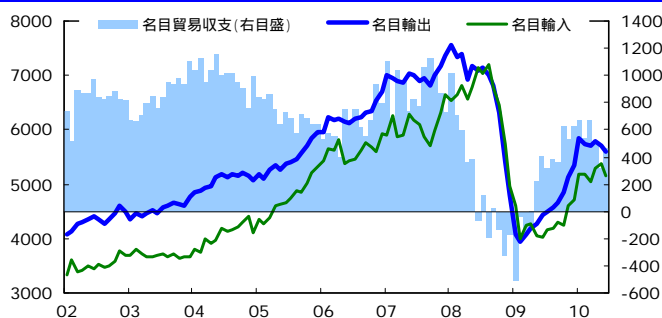
財政による景気刺激策や在庫復元が世界的に一巡したことに加え、円高の影響もあり、6月の輸出は減速。景気のシフトダウンが意識される中国向けの鈍化が顕著。但し、中国以外のアジアの新興国向けに支えられて、日本の輸出の拡大基調は維持される見通し。純輸出の実質 GDP 成長率に対する寄与度は4～6月期も前期比0.5～0.6%Ptの高水準が続く見込み。

貿易統計によると、輸出額の前年比は6月に27.7%と5月の32.1%から縮小した。財務省の季節調整値では前月比1.8%（5月1.7%）と2ヶ月連続で減少、4～6月期は前期比1.1%（1～3月期12.7%）と5四半期ぶりの減少に転じている。こうした輸出の急激な減速には、円高による価格変動が大きく影響しており、実質ベースでは名目ほどの減速とはなっていない。当社が価格変動を控除し試算している実質値（季節調整値）は6月に前月比0.1%（0.2%）と微減に留まり、輸出数量（当社季節調整値）は1.2%（5月1.6%）と寧ろ増加した。四半期ベースでは実質輸出は前期比3.9%（1～3月期8.1%）、輸出数量は4.8%（1～3月期6.5%）と鈍化はしているものの、拡大基調は維持されている。

市場では、米中二大国の景気減速が強く意識されているが、中国を除くアジアの新興国では、引き続き景気が堅調に拡大している。インフレ昂進に対する懸念から、一部の国々は金融引き締めを開始したが、引き締めペースは極めて緩やかであり、経済をオーバーキルする懸念は小さい。また、アジアの新興国に加えて、豪州やカナダなどの資源国も金融引き締めに踏み切っているが、世界経済の減速に対しては金融引き締めペースを柔軟に調整する方針を示唆している。財政による景気刺激策や在庫復元が世界的に一巡したため、日本の輸出の拡大ペースは鈍化が避けられないものの、ASEANなどアジアの新興国向けを中心に拡大基調自体は今後も維持されると予想する。

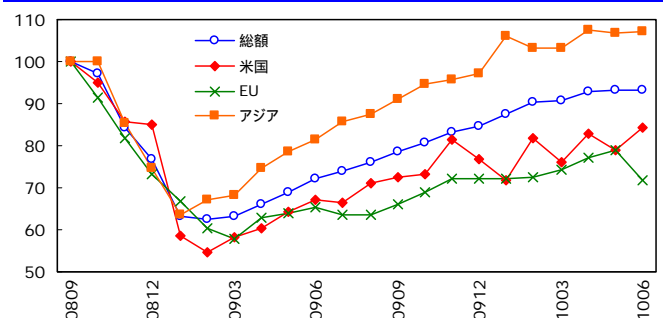
4～6月期の輸入額は、財務省の季節調整値ベースで前期比2.7%（1～3月期13.7%）とペースこそ鈍化した。輸出額が減少、輸入額が増加したため、名目ベースの貿易黒字は幾分縮小している。但し、実質ベースでは貿易黒字は引き続き拡大しており、（季節調整手法が異なることもあり）GDP統計ベースでは、輸出から輸入を控除した純輸出の成長率に対する寄与度は、前期比0.5～0.6%Ptと1～3月期の0.7%Ptからは幾分縮小するものの、高水準が続くと見込まれる。

貿易収支の推移(10億円、季節調整値)



(出所)財務省

実質輸出の推移(08年9月=100、季節調整値)

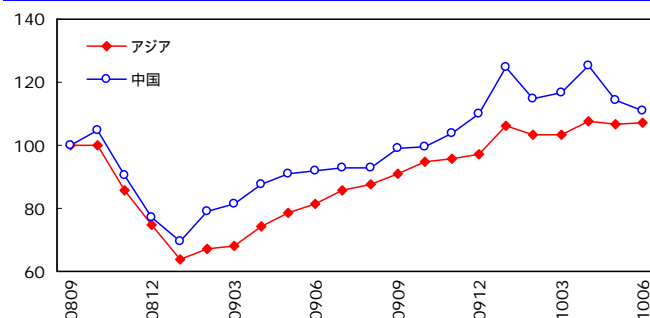


(出所)財務省、日本銀行

6月の輸出動向を実質ベースで見ると、最大のウェイトを占めるアジア向けは前月比 0.3%（5月 0.7%）と微増に留まった。NIEs 向けは好調だったが、中国向けが 2.6%（5月 8.9%）と2ヶ月連続で減少し、全体を押し下げた。中国向けでは、ストライキが響き5月に急減した自動車部品を中心とする輸送用機器が幾分持ち直したものの、在庫積み上がり懸念される化学や金属などの素材関連が減少したほか、一般機械や電気機器も軟調に推移し

ている。中国経済がサステナブルな成長ペースに向けてシフトダウンしつつある影響が現れたものと推測される。米国向けは前月比 6.6%（5月 4.7%）と大幅に増加した。主力の輸送用機器（自動車関連）が 12.8%と急増したほか、一般機械や電気機器なども好調に推移している。米国向けはポラマイルではあるが、均せば緩やかな増勢にあると判断される。EU 向けは前月比 9.0%（5月 2.5%）と大幅に減少した。3月以降に速いペースで拡大してきた反動によるところが大きいと考えられるが、対ユーロでの大幅な円高が日本企業の輸出競争力を損なっている可能性や、南欧諸国を中心とした財政支出抑制の影響が現れた可能性もあるため、引き続き動向には注意が必要である。

実質輸出の推移(08年9月=100、季節調整値)



(出所)財務省、日本銀行